

# そうかもしれない

2006(平成18)年9月8日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・脚本=保坂延彦/原作=耕治人『そうかもしれない』(『群像』1988年2月号)/出演=雪村いづみ/桂春團治/阿藤快/下條アトム/夏木陽介/烏丸せつこ(シナジー配給/2005年日本映画/106分)

……少子高齢化が最大の社会問題となり、家族の絆が失われ、孤独死さえ頻発しているニッポン国……。老いと病は必ずやってくるが、妻はアルツハイマー病、夫はガンという状況下でみせる、2人の夫婦愛は何とも感動的！雪村いづみの熱演に拍手を送るとともに、タイトルの意味がやっとわかる最後のシーンに大注目！ なお、感動に水をさすようだが、弁護士として指摘する3つの法的視点は以下の本文でじっくりと……。

## 雪村いづみの熱演に感服！

美空ひばり、江利チエミと共に雪村いづみが「三人娘」として映画界に進出したのは1955年だから、今から半世紀前。美空ひばり、江利チエミは既になくなったが、雪村いづみは今でも歌手、舞台、映画で大活躍を続けているれっきとした現役。そんな元気いっばいの雪村いづみが、この映画ではアルツハイマー病に冒される妻の役を熱演。

渡辺謙の『明日の記憶』(05年)は、働き盛りの男性にもアルツハイマー病があることを教え大評判となったが、この映画は、2人で仲良く老後を過ごしている高山夫婦の1人を襲うアルツハイマー病の恐ろしさと、それに負けないで立ち向かっていく夫婦の絆を描いている。

原作者の耕治人自身をモデルにした文筆家高山治を、三代目桂春團治が演じているのも大きな話題となっているが、正直言って彼の役者としての演技力はイマイチ……？ これに対して、映画前半の少しとぼけた感じの妻ヨシ子(雪村いづ

み)の演技は味があるし、後半におけるいよいよ病気が進み反応が鈍くなって壊れていくヨシ子の静かな熱演には、ほとほと感服!

そして、最後になってやっと、この映画のタイトルとなっている『そうかもしれない』の意味がわかることに……。

## テーマは夫婦愛だが……?

私は全然知らなかったが、原作の『そうかもしれない』は、1988年に口腔底ガんで亡くなった耕治人が老年の夫婦愛の極地を描いた傑作といわれる、『天井から降る哀しい音』『どんなご縁で』『そうかもしれない』の命終三部作の終作とのこと。そして、この映画における寡作の文筆家高山治は、ベストセラー作家とはいえなが既に6冊の本を出しており、それなりのファンもいるらしい……。私の目には、日々自筆であんなスピードで本当に少しずつ書いている単行本がモノにできるのかと思ってしまうが、出版社の担当者時岡定夫(下條アトム)から新しい単行本の執筆依頼がくるほどだから、治の筆力が評価されていることはまちがいない。

現在ベストセラーとなっている渡辺淳一の『愛の流刑地』も主人公は文筆家だが、こちらの主人公は愛やエロスに走ったのに対し、『そうかもしれない』はあくまで妻と向かい合うだけ……。子供のいない治とヨシ子は50年間夫婦生活を続ける中、今でも誰の助けも借りず互いに支え合って生きているが、2人の会話やアルツハイマー病になった後のヨシ子の「訴え」を聞いていると、結構治もわがままな亭主だったよう……?

しかしそんな仲の良い夫婦にも、老いと病いは確実にやってくるもの……。さて、2人を襲う老いと病いの中、2人の夫婦愛は……?

## 弁護士の目には全く違う視点が……

少子高齢化時代を迎え、日本国には、財政構造改革はもちろん、年金、医療、福祉、介護等々のさまざまな具体的で切実な問題点が指摘されている。しかし、この映画はそんな社会問題には全く触れず、あくまで(老)夫婦愛にテーマを絞っているから、韓流ラブストーリーで涙するのと同じように、ジャパニーズ型老

夫婦愛の絆に涙することができるはず……。

しかし、法的な問題点を考えれば、弁護士私の目には全く違う視点が……。ここでそんなことを書けばこの映画の感動を削ぐことになることを覚悟のうえで、あえてそれを3つだけ指摘しておきたい……。

## その1 財産管理は？ 遺言は？

治は今でも執筆依頼があるし、既に6冊の本が市販されているのだから、一定の印税収入があるはず。また、この家に移り住んで30年というから、多分この一戸建ての住宅は土地・建物とも治の所有で、ローンも完済しているはず……。もっとも映画の中では、治が時岡に原稿を手渡す際にお金を用立ててくれと頼んでいたから、大きな収入はないのかもしれない。しかし、出版社はそれに快く応じているのだから、少なくとも治の収入や資産には何の心配もないはず……。すると、治が財産管理としてまず第1にやらなければならないのは、実印や権利証、印税契約その他の重要書類を銀行の貸し金庫に預けること……。

そして第2に、私がいつも身近な人に勧めているように、遺言を書くこと！ 治が死亡した場合、子供がおらず両親もいない治の法定相続人は、妻（4分の3）と兄弟姉妹（ないしその子供）（4分の1）になる。ストーリー上、治の兄弟姉妹は誰も登場せず、親族として登場するのはヨシ子の姉の息子森田武（阿藤快）だけ。しかし、もし治に兄弟姉妹（ないしその子供）がいる場合は、当然その兄弟姉妹が4分の1の法定相続人となる。したがって、治がそれを望んでいないのなら、兄弟姉妹には遺留分がないことを前提として、「遺産はすべて妻ヨシ子に相続させる」という遺言書を書いておくべき。そうでなければ、治の死後、全く予想もしなかった遺産争いになる危険が……。

## その2 成年後見は？

近年、禁治産者の制度がなくなるとともに、成年後見制度が生まれたことは皆さんも聞いたことがあるはず。成年後見にも、任意後見と法定後見の2種類があり難しいが、誰にでも老いが訪れ、補助、保佐、後見を必要とする状態になることは明らか。少子高齢化社会になればなるほど、この成年後見制度の活用が望ま

れている。

この映画の場合、ヨシ子がアルツハイマー病のために施設に入るについて、「市の制度」がさかんに強調されていたが、それは現実離れもいいところで、当然本人や家族にかなり高額な費用負担があるはず。また、治の口腔底ガンの手術や入院についても、高額な費用がかかるはず。

もちろん、この映画はそんな経済的な問題点には全く触れていないが、現実にはそれが大変な問題。だって、この映画のように妻がアルツハイマー病で施設に入り、夫が口腔底ガンで入院するという事態になった場合、一体誰がその費用の支払いをするというのだろうか……？ もちろん、ヨシ子の姉の息子武には、治のお金を動かすについて何の権限もないから、法的にはどうしようもない最悪の事態になってしまうこと必至。したがって、治とヨシ子のように、子供もなく2人で支え合って生きている老夫婦にこそ、成年後見制度の活用が不可欠なのだが……。

### その3 - 葬儀は？ 遺産分割は？

遺言書の作成と平行な話だが、この映画のように治が入院先で死亡した場合、まず問題になるのは、誰がその葬儀をするのか、そしてその費用は誰がどこからどう出すのかということ。そして第2に、治に兄弟姉妹（ないしその子供）がいた場合、アルツハイマー病のヨシ子とどうやって遺産分割の協議をするのかという問題。これらの法的な問題点を処理しない限り、治とヨシ子が住んでいたあの土地・建物は誰も処分できず、朽ちていくだけということになりかねないわけだ。

弁護士の目にはこんな現実論ばかりが先に見えてしまうが、そう考えていると、さかんに治の家に顔を出し、いろいろと治とヨシ子の面倒を見ていた時岡だって、遺産争いの事件をたくさん見てきた私の目には、ひょっとしてあれは治が死亡した後の財産目当て、と見えないことも……？

2006（平成18）年9月8日記